神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The use of Chinese character in Yuan (元) Ming (明) period : when "ge" (個) finds mention in literature

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2000-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 晴彦, Sato, Haruhiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1454

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

元明期の文字表記

——＜個＞の出現をめぐって——

佐　藤　晴　彦

は　じ　め　に

よく知られているように，“ge”という語には＜箇＞，＜个＞及び＜個＞の三つの表記法がある。現在の基準からすると＜箇＞は旧体字として，＜个＞は簡体字，＜個＞は普通の表記として一般に認識されているだろう。この三つのうち＜箇＞，＜个＞に関しては，『説文』に，

「箇，竹枚也，从竹固聲。箇或作个，半竹也。」

とあるように，古くから使われていたということがわかる。しかし＜個＞という表記法には不思議なことがある。それは宋代の韻書類に収められているにもかかわらず，実際に使われた用例が見当たらない，つまり何時頃から使われだしたのかがよくわからないという点である。

例えば『廣韻』では，

「箇，箇數又枚也，凡也。个，明堂四面偏室曰左个也。個，偏也。」

とある。ここでは＜個＞を明確に＜箇＞の異体字と認めた記述になっていないにせよ，並列している以上は同じものという意識があったのであろう。また『類篇』でも，

「個，居賀切，偏也」

として＜個＞を著録し，さらに『集韻』では，

「箇个介，居賀切，設文竹枚也。或作个、介，通作個。」

のようにはっきりと＜箇＞の異体字と認めている。太田辰夫1988ではこうした記述をうけて，

「“個”も宋代には使用されていたらしい。[1]」

と結論ずけられた。宋代で行われていた韻書に著録されているのであるから，宋代には使用されていたというのは当然の結論である。ところが，不思議なことに実際の用例がみられない。

一方歴代の字蹟を収集した書道の辞典類で李邕の碑文からの＜個＞を挙げているものがある。たとえば關思亮等1978がそうである。[2] 李邕といえば李北海とも呼ばれ，『文選』の注で有名なあの李善の子である。これが事実だとすると，＜個＞は宋代はおろか，唐代にもう存在していたことになる。ところが一方では松尾良樹2000に，

「敦煌写本には「个」と「箇」のみが用いられ，「個」が見えない…[3]」

という指摘がある。

考えてみれば“箇”という語自身からして文言で使われる語ではなく，口語系統の語である。唐代の口語系統の資料で代表的な敦煌写本に＜個＞が見えないとなると，むしろ指摘されている李邕の碑文の信憑性の方を疑いたくなる。

さらに問題は唐代，宋代だけではない。元代でもはたして＜個＞が使われていたのかという疑問がある。入矢義高1956では，

「元代白話碑では「個」の字を用いることはない。常に「箇」か，或いはその略體の「个」である。」[4]

と述べておられる。むろん元代白話碑だけを対象とした発言であるが，白話碑のみならず，元代全般にわたって＜個＞が使われているのを，筆者は寡聞にしてまだ知らず，元代でも使われていなかったのではないかと思われる。

だとすると，＜個＞はいったい何時頃から使われ出したのか。仮に唐代，宋代にすでにあったとしたなら，それが極く一般に普及するようになったのは何時頃なのか。小論ではこの問題について検討せんとするものである。

1．どの資料から着手するか？—『董西廂』の場合

では何を手がかりにこの問題の検討を始めればより効果的であろうか。

いくつか方法が考えられるが，同じ作品で時期的に異なる版があるものを調べるのが効果的であろう。ちょうど朝鮮資料における『朴通事』『老乞大』のように，時代の移り変わりによりその時期の言語の実際にあわせて改編されていることが期待できるからである。

ただ今回は文字表記を問題とするので，表現の変更は多少あってもかまわないが，なるだけないほうが望ましい。朝鮮資料もさしつかえないが表記法という点を考えると必ずしも最適とは思えない。何故なら，文字表記というのは，もし規範意識が働けば，当然表記を統一しようとするからである。“箇”なら“箇”を例にとると，＜箇＞を正字とする意識が働けば，当然それに統一しようとする意識が働く。その点から考えれば，とりわけ当時の朝鮮の状況から推して中国はやはり手本とすべき国という意識をもっていたであろうから，たとえ＜个＞とか＜個＞とかいう文字の存在を知っていたとし

ても，正字をさしおいてそれらを使用するという可能性は低いであろう。従って朝鮮資料は今回の調査にはむかないと判断した。

言語表現としてあまり手が加えられず，しかも異なる時期にいくつかの版があること，従って文字表記のうえでは改訂があると思われるもので，しかも資料の入手が比較的簡単なもの。こんな手前勝手な資料が果たしてあるのだろうか？そこで筆者がふと思いついたのは『董解元西廂記』である。

周知の如く『董西廂』は，その成立は金代と思われるが，現存する最古の版本は嘉靖36年（1557年）の序がある版が知られている。その後もいくつかの版本が出ており，必ずしも嘉靖本のように出版年までわかるほど明確ではないにしろ，出版された年号くらいはわかるし，しかもそのうちのいくつかには影印本がある。

そこで『董西廂』の以下の版本における“箇”の使用状況を調査してみた。

1 『古本董解元西廂記』（嘉靖36年序，略称嘉靖本；中華書局1963年影印）
2 『董解元西廂』（天啓崇禎刊，略称湯本；人人文庫1976年影印）
3 『董解元西廂記』（崇禎13年刊，略称六本；文学古籍刊行社1955年影印）
4 『董解元西廂記』（崇禎間刊，略称黄本；齊魯書社1984年影印）
5 『暖紅室彙刻西廂記』（1915年頃，略称暖本）

そうすると，次のような結果となった。

表1　董西廂における“箇”

	箇	个	個
嘉靖本（嘉靖36）	220	0	6
湯本（天啓崇禎）	0	0	226
黄本（崇　　禎）	11	0	215
六本（崇禎13年）	223	0	1
暖　本（1915年）	224	0	0

嘉靖本の6個の＜個＞が特に一つの傾向があるわけではない。その中には，

五百來兒郎，一箇個刁厥。　(3.2.a.4)[5]

一箇個精神俏沒彈剥。　(3.2.b.2)

のように，重ねられた二つの“箇”に対し，一方は＜箇＞，もう一方は＜個＞を使うといった，恣意的といえばこれほど恣意的なことはないと思える使い方をしており，＜個＞が特に使いわけがあったとはとうてい思えない。

それはともかく，**表1**からは次の二点が推定できるだろう。

1．＜個＞は嘉靖期には使われていたらしい。ただ使用頻度が低いところからすると，この前後から使用され始めた可能性もある。

2．天啓，崇禎期にはかなり普及していたらしい。あるいはすでに「正字」と認識するまでの地位を得ていたのかも知れない。

うえでは＜個＞が遅くとも嘉靖の頃には使われていたらしいということがわかった。ではそれより以前はどうであったのだろうか。嘉靖以前に＜個＞はあったのかなかったのか。あったとすれば何時頃なのか。そうした点について検討する必要がある。次ぎに嘉靖以前の状況を見ることにしよう。

2．元明期の資料

嘉靖以前を調査するには少なくとも元代の時期も含め，明初期から中期のものまで調査する必要があろう。しかも資料としては出版時期が比較的明確であるものが望ましい。たとえ出版時期が××年と断定できなくとも，せめて萬暦だとか嘉靖とかの年号がわかっていることが望ましい。そうした条件にあう資料を調査すると，**表2**のような結果となった。[6]

ここでも15の出身傳の1個，21の看灯傳の3個の＜個＞はいずれも量詞のそれであり，特に他の＜箇＞＜个＞との間に使い分けがあるとは思われない。

後拜哥々两個人。　(p.294.7)[7]

表2　元明期における“箇”

	箇	个	個
1太平樂府（至正11年［1351］）	156	92	0
2大誥武臣（洪武21年［1388］）	26	0	0
3辰 鈎 月（永樂2年［1404］）	52	0	0
4義勇辭金（〃 14年［1416］）	16	0	0
5降 獅 子（〃 14年［1416］）	11	0	0
6八僊慶壽（宣德7年［1432］）	22	0	0
7常 椿 壽（〃 8年［1433］）	28	0	0
8十 長 生（〃 9年［1434］）	13	0	0
9神 仙 會（〃 10年［1435］）	40	0	0
10嬌 紅 記（〃 10年［1435］）	70	73	0
11薛 仁 貴（成化7年［1471］）	1	38	0
12石郎駙馬（〃 7年［1471］）	0	47	0
13歪 烏 盆（〃 8年［1472］）	0	58	0
14開 宗 義（〃 13年［1477］）	0	53	0
15出 身 傳（〃 ?年［ ? ］）	0	21	1
16陳州糶米（〃 ?年［ ? ］）	0	61	0
17認 母 傳（〃 ?年［ ? ］）	0	36	0
18斷曹國舅（〃 ?年［ ? ］）	5	88	0
19張 文 貴（〃 ?年［ ? ］）	0	41	0
20斷白虎精（〃 ?年［ ? ］）	0	13	0
21看 灯 傳（〃 ?年［ ? ］）	1	28	3
22孫 文 儀（〃 ?年［ ? ］）	2	35	0
23孝 義 傳（〃 ?年［ ? ］）	0	52	0
24白 兔 記（〃 ?年［ ? ］）	4	127	0
25西 廂 記（弘治11年［1498］）	178	0	0
26琵 琶 記（嘉靖27年［1548］）	29	213	0
27寶 劍 記（〃 28年［1549］）	117	2	0
28古董解元（〃 36年［1557］）	220	0	6
29十 段 錦（〃 37年［1558］）	395	1	0

表2を見ているといくつかの興味あることに気がつく。例えば3～9までは周憲王の作品，11～24までは『明成化説唱詞話叢刊』収録の作品である。周憲王の作品がすべて，おそらく当時でも「正字」と認められていたであろう＜箇＞を使うのに対し，成化説唱詞話は主として＜个＞を用し，＜箇＞が極めて少なく若干の＜個＞が見え，その中間に位置する10の嬌紅記が両者にまたがるように＜箇＞と＜个＞を用しているという点である。これは単なる偶然かも知れない。が偶然でないとすれば，二つの原因が考えられる。その一つは，詞話叢刊の出版は確かに成化年間であるが，実際には元代の影響が

強く（『花關索出身傳』はその最たるもので元代の資料として見なすべきである），それに明代の要素が加わったといういわば時代的な特徴の現れと考えられること。つまり出版時期は周憲王の作品より遅いものの，用字法としては元代のそれを色濃く残しており，用字法は周憲王より前の状況であろうと考えられるという時代的な要因。いま一つは，一方が藩刻でいわば官版に近く，もう一方が坊刻という，そうした出版のレベルの違いに起因していると考えられるということ。

このように，出版時期とその資料自体の前後関係とは必ずしも一致しないことは考え得ることである。例えば『琵琶記』はうえにあげた嘉靖本以外に弘治本（弘治11年出版）がある。弘治，嘉靖間の情況を見る意味からも，『琵琶記』の二種の版本における“箇”の使われ方を見ることにしよう。

3．弘治，嘉靖年間—『琵琶記』の場合

『琵琶記』の弘治本，嘉靖本における“箇”の使用状況を見てみると次ぎのようになる。

表3　『琵琶記』における“箇”

	箇	个	個
弘治11年［1498］	170	0	50
嘉靖27年［1548］	29	213	0

一見してわかるように，嘉靖本の方が＜个＞を多用し，弘治本よりはるかに元代の用字法に近い。嘉靖本におけるその他の用字法（例えば「慌てる」は＜慌＞より＜荒＞を多用し，“genqian”“gendi”は＜跟前＞＜跟底＞とせず，＜根前＞＜根底＞とするなど）を見ても，さらに状語の＜哏＞を使うなど，元代の用字法そのものである。嘉靖本の書名が『新刊元本』と銘打っているのを全面的に信用するのは危険かも知れないが，全く根も葉もないことではないようである。おそらく嘉靖期に書写された時，そのベースになったテキストが元刊本に近かったのであろう。そこで弘治本より50年も後で書

写されながら，弘治本より古い用字法になったものと思われる。これは興味ある現象であるが，小論の主旨から離れるので，これ以上は立ち入らない。

ここでは説唱詞話叢刊のうちの二作品（15，21）に若干の＜個＞が，また弘治本『琵琶記』にも＜個＞がかなり使われているということが確認できたことの方が意味が大きいというべきである。なぜなら成化年間となれば，前節で見た『董西廂』の嘉靖期より80年くらいさかのぼることになるからである。

ところで，うえでも述べたように成化詞話叢刊は元代の用字法を色濃く残している。とするとそこに見える＜個＞はいったい元代のものなのか，それとも明代のものなのかという問題が残る。筆者は元代で＜個＞が使われていないという状況を考えると，やはり説唱詞話叢刊の＜個＞は明代のものであろうと考えておきたい。

ではこの成化年代が＜個＞の初出のものであろうか，となるとそこまでは断言できない。なぜなら周憲王の資料で見る限りは＜個＞はないが，そこにうえでも少しふれたように，もし「規範」という意識が働いていたとすると当然＜箇＞で統一したであろうし，＜個＞は仮に知っていたとしても使わないだろうからである。この問題を解決するのは，明初の他の資料を調査するより仕方ないが，今は適切な資料が思い浮かばないので，今後の課題とし，ここでは遅くとも成化年間には＜個＞が使われていたことを確認しておきたい。

次ぎに考えるべきことはその後の状況である。とりわけこれまで検討した資料では萬暦年間が抜けている。そこで次ぎに萬暦年間の資料を検討することにする。

4．萬暦期の資料

ここまで検討したなかでは萬暦期がぬけていた。むろん『董西廂』にも萬暦本があるから，それを調査するのは手っ取り早いわけであるが，残念ながら影印本が出版されていないため，簡単にはみれない。そこで次善の策とし

て，萬暦期の他の資料をもって参考とすることにする。まず『水滸傳』と『金瓶梅詞話』である。

4．1　『水滸傳』と『金瓶梅詞話』

いま，それぞれ10回までの“箇”の使用状況を表にすると，次ぎのようになる。

表4　『水滸』『金瓶梅』における“箇”（1～10回）

	箇	个	個
水　滸	452	0	311
金瓶梅	2	0	413

“箇”の総計が，『水滸』が圧倒的に多いのは，各回の分量の多寡に関係していることがらであり，本質的な問題ではない。ここでは，

1．『水滸』において＜箇＞が優勢ではあるが，＜個＞もかなり使われていること。

2．『金瓶梅』ではほぼ＜個＞に統一されつつあるということ。

の二点が重要である。

では同じ萬暦期の資料である『元曲選』の場合はどうであろうか。次ぎに『元曲選』を見てみよう。

4．2　『元曲選』の場合

『水滸傳』，『金瓶梅詞話』と同じように，『元曲選』における“箇”の使用状況を，アットランダムに五つの作品を選び調査すると，次ぎのようになった。

表5　『元曲選』における“箇”

	箇		个		個	
	白	唱	白	唱	白	唱
范張鷄黍	2	7	0	0	16	16
後庭花	37	15	0	0	39	13
任風子	3	27	0	0	24	2
貨郎旦	55	19	0	0	0	0
望江亭	26	1	0	0	26	15
合　計	123	69	0	0	105	46
総　計	192		0		151	

念のために「白」と「唱」に分けて調査してみたが，両者にそれほど顕著な差はないらしい。興味あるのは，先の『水滸』と非常によく似た結果となったということである。つまり＜个＞がなく，＜箇＞と＜個＞が同じくらい使われているという傾向が見られ，＜個＞が主流になっている『金瓶梅詞話』とは状況が異なるという点である。これはおそらく『水滸』，『元曲選』が元代の資料を受け継ぎつつ明代の要素が加わっていること，それに対し『金瓶梅』が新たに明代に創作された作品であるということと関係があろう。

それはさておき，ここでより重要なことは，萬暦年間の資料で＜個＞がかなり普及しているという点である。1で『董西廂』を検討した際は，＜個＞が天啓，崇禎年間には普及していたということしかわからなかったが，ここでその傾向は既に萬暦に存していたということが明かとなった。つまり＜個＞という表記は明代初期に使われだし（その確実な例は，今のところ成化年間のものしか指摘できないが），萬暦の頃にはごくふつうの表記法と認められていたらしいということである。

ま　と　め

以上述べてきたことをまとめると，

＜個＞はおそらく明初に現れ，萬暦年間にはごくふつうの表記法として定着し，＜箇＞と同じく「正字」の地位を得たものと思われる。

となる。

筆者がここまで＜個＞の普及時期にこだわるのはそれなりの理由がある。小論で考察したように，もし＜個＞が使われだしたのが明代の成化年間前後で，その普及が明の萬暦頃だとしよう。だとすると，その他の資料で出版時期が明確でない資料，もしくは出版時期がある程度わかっていても，出版された時に果たして手が加えられたか否かが，こうした用字法を根拠として判断できるということになる。

例えば『清平山堂話本』（『六十家小説』）は話本のうちでもやや古いもの

を残していると思われるが，問題は洪緶が嘉靖年間に出版した時，果たして手を加えたかどうか。そうした問題に対し，主観的な感じ方という角度からではなく，客観的な判断をするための根拠を提供できるであろうということである。

こうした現在では極くあたりまえの文字表記であっても，その中で通時的流れを明確にできる文字表記が明かになれば，それを根拠として，成立時期が不明の資料の成立時期や出版時期を明かにできることになる。こうした文字表記を根拠にした年代の推定は，音韻，文法，語彙といったことを根拠にするのと同じくらい重要であり，且つ音韻，文法，語彙にたよるのみでは解決できない問題を解決する方法として，もっと注目されるべきである。筆者が文字表記にこだわるのはそこにこそある。

では残された問題として，＜個＞に唐代の例があると指摘しているものはどうなのであろうか？次ぎにそれを検討することにする。

まず今日までに指摘されている唐代の用例は，問題があることを指摘しておきたい。例えば關思亮等1978が李邕の字蹟だとする＜個＞の字は，恐らく關思亮等の単なるミスであろうと考えられる。ミスだと判断できるのは次ぎの理由による。

(1) 同じ筆蹟の＜個＞が，巌谷修等1983では董其昌の筆蹟としてあげられ，同書では李邕の筆蹟には＜箇＞があげられ，關思亮等があげるものとちょうど逆転していること （図版(1)参照)。

(2) 現在見られる李邕の拓本，董其昌の書にてらしても，關があげている李邕の筆蹟とは異なり，はるかに董其昌に似ていること。

以上のことから，關思亮等があげる＜個＞は唐代のものとは認められず，明代の董其昌のものと判断する。

次ぎに＜個＞の唐代の例をあげるものに，白川静1984がある。氏は＜個＞について次ぎのように述べている。

「古い用例はなく，副詞にそえて，韓愈の〔盆池の詩〕「老翁，眞個（ほんとうに）兒童に似たり」のように用いる。個人・個性のように用いるのは，みな新しい翻訳語である。」(p.276)

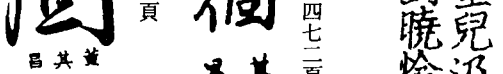
「古い用例はなく」「韓愈の…眞個…のように用いる」という記述を読めば，読者は恐らく＜個＞は唐代からあったと理解するであろう。しかし考えてみればわかるように，韓愈の詩では唐代のものは残っていない。せいぜい宋本もしくはその復刻である。今回は筆者は残念ながら宋本を見る機会にめぐまれなかったが，元刊本（四部叢刊本『朱文公校韓昌黎先生集』）及び明刊本（嘉靖16年游居敬序『韓柳文』）で確認したところ，この箇所いずれも＜眞箇＞としており＜個＞とはなっていない（図版(2)参照）。元本，明本にしてしかりである。宋本が＜個＞につくる可能性はほとんどないと思われる。

最後に残されたもう一つの問題として，何故＜個＞が『集韻』など宋代の韻書に収録されているのかがある。

この疑問については，正直なところ筆者にもよくわからない。ただ次ぎのような可能性は考えることができる。それは，宋以前に＜個＞は確かに存在したが，しかし現存する資料では見られなくなった。それは資料的な限界もあろうし，あるいは現実に＜個＞が使われなくなっていたという情況もあろう。そして再び使われ出したのが明初のことで，萬暦頃には急速に普及したという可能性である。こうした現象は，中国語史のなかでこれまでにもあったことである。例えば状語の“很”という語が，数は多くないとはいえ元代で使われていたにもかかわらず（但し文字表記は＜哏＞），明代では使われなくなり，清代になって北京語で使われだしたというような現象もある。むろんそれは＜哏＞が現れる資料が主として北方の言語で書かれたものであり，明代の資料が主として南方の資料であるという地域的な要因もあろうが，ある言語現象が一時的に見えなくなり，その後復活するということは十分考え得る。そのように考えれば，＜個＞が一時使われなくなったという可能性

もあながち否定できないであろう。

図版(1)

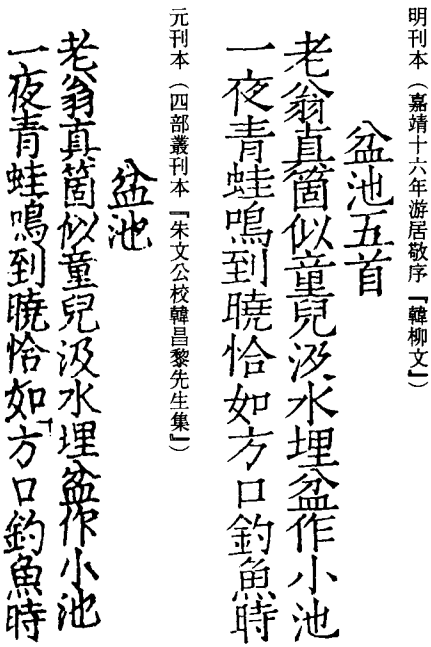


叢谷修等『行書草書大字典』四七二頁

關思亮等『行書字典』六七七頁

箇

図版(2)



明刊本（嘉靖十六年游居敬序『韓柳文』）

盆池五首

老翁真箇似童兒汲水埋盆作小池
一夜青蛙鳴到曉恰如方口釣魚時

元刊本（四部叢刊本『朱文公校韓昌黎先生集』）

盆池

老翁真箇似童兒汲水埋盆作小池
一夜青蛙鳴到曉恰如「方口釣魚時

［付記］

1．小論で使った黄本『董解元西廂記』並びに弘治本『琵琶記』（凌刻曜仙本琵琶記）はともに内田慶市君（関西大学）ご架蔵のものである。貴重な資料を借覧させて下さった同君には感謝もうしあげる。

2．小論はもっと早く脱稿しているべきものであったが，大幅に遅れてしまった。幸か不幸か，遅くなってしまったが故に，梅祖麟教授（コーネル大学），丁邦新教授（香港科技大学）をお招きしての「中国歴史言語学討論11月例会」で口頭発表する機会に恵まれた。席上両教授をはじめ貴重なご意見を下さった方々に感謝したい。

注

（1） 太田辰夫 1988 p.35
（2） 關思亮等 1978 p.677

（3） 松尾良樹 2000 p.305
（4） 入矢義高 1956 p.224
（5） 嘉靖本の巻数，葉数，表裏，行数を示す。
（6） 小論の調査を始めた段階では，資料を出版年が明確なものに限定していた。＜個＞が使われた時期を特定したかったからである。その後渡辺浩司君（北海道大学）から，成化説唱詞話叢刊の出版年不明の資料の中に＜個＞があることを教わった。そこで元代の特徴を色濃く残していると思われる『花關索出身傳』を除き詞話叢刊全体を調査することとした。渡辺君のご教示には感謝している。

小論で使用したテキストはそれぞれ次の通り。

太平樂府：四部叢刊本
大誥武臣：『皇明制書』上巻 （1966年1月，古典研究会）
辰 鈞 月：周藩原刻本 （中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館本）
義勇辭金：　〃　（『全明雑劇4』所收）
降 獅 子：　〃　〃
八僊慶壽：　〃　（中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館本）
常 椿 壽：　〃　〃
十 長 生：　〃　〃
神 仙 會：　〃　〃
嬌 紅 記：『古本戯曲叢刊初集』
薛 仁 貴：『明成化説唱詞話叢刊』（臺灣鼎文書局，1979年影印本所收）
石郎駙馬：　〃　〃
歪 烏 盆：　〃　〃
開 宗 義：　〃　〃
出 身 傳：　〃　〃
陳州糶米：　〃　〃
認 母 傳：　〃　〃
斷曹國舅：　〃　〃
張 文 貴：　〃　〃
斷白虎精：　〃　〃
看 灯 傳：　〃　〃
孫 文 儀：　〃　〃
孝 義 傳：　〃　〃
白 兔 記：　〃　〃
西 廂 記：『奇妙全相註釋西廂記』臺灣世界書局，1976年影印本
琵 琶 記：『新刊元本蔡伯喈琵琶記』（『全明傳奇』所收。但し，不鮮明な箇所は『古本戯曲叢刊初集』本で確認した）
寶 劍 記：『古本戯曲叢刊初集』
古董解元：『古本董解元西廂記』中華書局，1963年影印本
十 段 錦：『雑劇十段錦』嘉靖戊午仲夏紹陶室刊

（7） 使用したテキスト鼎文書局本の頁数と行数を示す。

参 考 文 献

赤松紀彦他　1998 『「董解元西廂記諸宮調」研究』汲古書院
傳田　章　1986 「董西廂板本ノート」『外国語科研究紀要』第34巻5号（東京大学教養部）

入矢義高　1956　「蔡美彪氏編『元代白話碑集録』を讀む」『東方學報』第26冊
巌谷修等　1983　『行書草書大字典』柏書房
松尾良樹　2000　「讀『大唐三藏取經詩話』」『人間文化研究科年報』第15号（奈良女子大学）
太田辰夫　1988　『中国語史通考』白帝社
關思亮等　1978　『行書字典』国書刊行会
白川　静　1984　『字統』平凡社
その他
書道藝術第五巻　1972　『李邕　張旭　懷素　楊凝式』中央公論社
書跡名品叢刊　17　1959　『唐　李邕　雲麾將軍李思訓碑』二玄社
同　66　1961　『唐　李邕　麓山寺碑』二玄社
同　77　1962　『明　董其昌　行書詩卷』二玄社
同　78　1962　『明　董其昌　臨自叙帖/項元墓誌銘』二玄社
書学大系第36巻　1991　『董其昌』同朋舎